

令和 3 年 6 月 13 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00319

研究課題名（和文）タイ・仏印 を描いた日本の 戦後文学 に関する分析研究

研究課題名（英文）Analysis of Japanese Postwar Literature Depicting Thailand and French Indo-China

研究代表者

久保田 裕子（KUBOTA, YUKO）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：30262356

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：タイおよび 仏印 と呼称されたアジア地域について、太平洋戦争期の 大東亜共栄圏 時代、1960年代以後の高度経済成長期、1980年代以降のツーリズムの時代から現在まで、日本語テキストに描かれた表象がどのように構築され、流通したかという問題を明らかにした。三島由紀夫は、戦後文学 の作家の中で、タイ・ラオス・カンボジアを舞台とした『豊饒の海』4部作、『文化防衛論』、『癩王のテラス』などの小説・評論・戯曲を執筆している。本研究における調査・分析結果をふまえて、三島研究をアジアとの関係性という新たな視点から考察することで、戦後文学 の国際的側面を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、小説などの文学テキストが同時代言説とどのように関連しているかという経緯をたどり、文学テキストと歴史的言説の関連性について明らかにした点にある。特に三島由紀夫研究を通して、アジアとの関係性という視点から日本の 戦後文学 を見直し、異文化表象をめぐる文学史的な問題提起となった。研究成果の社会的意義は、日本とアジア地域の歴史・文化交流を背景とした作品について考察する上で、日本側だけの視点ではなく、タイ人研究協力者と国際共同研究を行うことで、双方向的な観点から考察することが可能になった。また研究成果を国際学会において発表し、両国の国際学術交流にも寄与することができた。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies how Japanese text representations of Thailand and the Asian region known as the French Indo-China were constructed and spread from the era of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere during the Pacific War, period of high economic growth after the 1960s, and era of tourism after the 1980s to the present. Among other writers of postwar literature, Yukio Mishima wrote novels, critiques, and dramas set in Thailand, Laos, and Cambodia; for example, the tetralogy *The Sea of Fertility*, the essay "A Theory of Cultural Defense," and the play *The Terrace of the Leper King*. Based on research and analysis, this study identifies international aspects of Japanese postwar literature by conducting research on Mishima from a new perspective, that is, relationships with other Asian regions.

研究分野：日本近代文学

キーワード：タイ 仏印 三島由紀夫 戦後文学

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 日本近代文学に描かれたアジア表象

日本近代文学研究の領域において、国際的なポスト・コロニアル研究が与えた影響により、小説や評論、戯曲などの文学テキストがいかに異文化を表象してきたかという問題が再検討されるようになった。太平洋戦争期まで歴史的にはタイ・泰・仏印と呼称された場所は、日本国内において地政学的に結び付けられてきた。大東亜共栄圏時代、1960年代以後の高度経済成長期、1980年代以降のツーリズムの時代から現在まで、日本近代文学においてアジアという場所がどのように描かれてきたかという研究課題があった。

### (2) 太平洋戦争以後の日本におけるインドシナ半島地域に関する文化表象

明治期の南進論の時代から、昭和戦前・戦中期には大東亜共栄圏の一部と見なされたインドシナ半島地域は南洋と呼ばれ、さまざまな文学テキストを通してイメージ表象が共有されてきた。その中でもタイ・泰・仏印を描いた文学テキストについての研究は、東アジア地域を対象とした分析研究に比べると、日本近代文学研究における研究の蓄積が十分ではないという問題があった。例えばタイは太平洋戦争後の日本と経済的・文化的にも強い影響関係がある。戦後文学について考察する上で、タイと言語的・文化的にも関係の深いラオスを含め、インドシナ半島諸国の仏印と呼ばれたベトナム・ラオス・カンボジアも研究の視野に入れる必要性が生じた。

## 2. 研究の目的

### (1) 太平洋戦争後の戦後文学に描かれたアジア表象

本研究においては、研究期間を通して、太平洋戦争前期・戦後を対象として、日本の戦後文学に描かれたインドシナ半島の地域をめぐる文化表象について同時代資料と比較しつつ分析し、イメージが構築され、流通していった過程について調査し、その結果を分析した。特に戦前・戦後で切断したかに見える戦後文学が、過去の記憶を文学表象としてどのように継承してきたかという問題について明らかにすることを目的とした。

### (2) 三島由紀夫研究におけるアジア表象

三島由紀夫研究については、アジア地域(タイ・ラオス・カンボジア)を舞台とした小説やエッセイを執筆しているが、従来の先行研究において、三島とアジアの問題については、十分に言及されることはなかった。調査結果をふまえ、アジアという新たな視点から三島研究を行うことが本研究の目的の一つである。

## 3. 研究の方法

### (1) 小説・評論・戯曲などの文字テキストに加え、映画・演劇などの視覚表象についてタイ・泰・仏印を表象したテキストを収集し、時代背景を反映したコンテキストとしての新聞・雑誌記事などの日本語の同時代言説と関連させて分析した。

### (2) 国会図書館や日本国内の大学図書館等に所蔵されているタイで刊行された図書・雑誌などの日本語資料の調査収集を通して、表象分析の基盤となる資料収集作業を行った。例えば(1)で収集したテキストである「日本タイ協会々会報」などの日本語の同時代言説の資料と三島由紀夫の『春の雪』(新潮社、1969)についての照合・分析を行った。

### (3) 上記の(1)(2)の作業を踏まえた上で、仏印と呼称されたベトナム・ラオス・カンボジアを描いた近代日本文学のテキストについて、アジアを表象した文学テキストとして位置付けるために、同時代資料との比較検討を通して分析した。特に三島由紀夫のタイを舞台とした『暁の寺』(新潮社、1970)、カンボジアを描いた『癩王のテラス』(中央公論社、1969)などの戦後文学において、歴史的状況を背景としたテキストについて考察し、テキストの中のイメージの構築と流布の経緯について考察した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

タイの人と社会を描いた昭和10年代から現在に至るまでの日本文学テキストや同時代資料を調査・収集し、タイ・ラオス・ベトナム・カンボジアに関連する日本近代文学に関するテキストについての分析・考察を行った。それらの調査結果に基づき、研究成果として論文を公表し、学会発表等を行った。

三島由紀夫には、1960年代にインドシナ半島を背景にした小説・評論・戯曲がある。『暁の寺』のように、テキストの舞台となった時代が太平洋戦争後の時代を背景としているテキストにおいては、戦争期・戦前と戦後の時代との継承と断絶という課題が底流にあった。また『癩王のテラス』では、カンボジアのバイヨン大寺院を建立したクメール王朝のジャヤ・ヴァルマ

ン7世を描いているが、1965年に三島がカンボジアに旅行して取材を行い、アンコール・トムを訪れたことが背景になっている。そして1967年にベトナム戦争の渦中にあったタイやラオスを『暁の寺』の取材旅行で三島が訪れたときの見聞に基づいて、「文化防衛論」(「中央公論」1968・7)が執筆されたが、タイやラオスといったアジアの王室の現況から、「文化概念としての天皇」(「文化防衛論」)の存立の必要性を発見していった。「文化防衛論」の発想の起源となったインドシナ半島の王族については、『暁の寺』において、シャム(タイ)のチャクリ一朝、『癩王のテラス』ではカンボジアのクメール王朝を背景に描かれている。1960年代のベトナム戦争下のインドシナ半島の王室は、紛争や内戦に対峙しつつ、ナショナリズムの象徴的存在となっていたという歴史的経緯があるが、三島のテキストにもそのような状況が反映されている。例えば『暁の寺』は、1940年代、50年代が舞台となっているが、テキストの背景には三島が現地踏査を敢行したインドシナ半島における冷戦下の状況が反映されていたと考えられる。同時代の社会状況を背景にして、小説・評論・演劇というジャンルを横断しつつ、さまざまな表現の可能性を広げる過程で展開していった三島のテキストの成立過程を明らかにした。その成果として、「歴史的言説のアダプテーション 三島由紀夫『癩王のテラス』」(「第2回三島由紀夫とアダプテーション研究会」、日本大学文理学部、2018年9月8日)において、研究発表を行った。

三島はインドシナ半島を舞台としたテキストを発表しているが、三島とアジアの問題について考察する上で、太平洋戦前期の 南洋 と呼ばれた場所における、戦争・戦後という歴史的時間の接合と断絶という課題があることが明らかになった。さらに三島研究において、テキストをアジアから見る外部の視点を導入することで、新たな視点から日本の 戦後文学 を見直す可能性につながり、異文化表象をめぐる新たな文学史的な問題提起に貢献できた。その成果発表として、アジアに対する異文化表象の分析を通して、タイ人学生の日本への留学制度を同時代資料から明らかにした「三島由紀夫『春の雪』におけるシャム王室と留学制度」(「三島由紀夫研究」、2019年5月)を発表した。

アジア地域だけではなく、樺太からの引揚げ経験を背景として、太平洋戦争中に 外地 と呼ばれた旧植民地を描いた吉田知子、仏印での戦争経験のある男性との恋愛を描いた『氷点』でベストセラーとなり、社会現象化した原田康子、太平洋戦争後の日常の中の原爆の問題について描いた竹西寛子のテキストを収録した全集に付された資料として、「吉田知子、「水曜日」、解題、略年譜、参考文献」「原田康子、「涙蠟」、解題、略年譜、参考文献」「竹西寛子、「儀式」、解題、略年譜、参考文献」、(『新編女性作家全集』第9巻、2019年6月、六花出版)を発表した。

戦後文学 を対象とした小説に加え、三島由紀夫の映画などの視覚表象について、新聞・雑誌記事などの同時代言説と関連させて分析した。その成果発表の一環として、「第3回三島由紀夫とアダプテーション研究会」(2018年3月9日、日本大学文理学部)を企画・運営し、映画との関連についての講演記録を活字化した映画監督吉田大八氏の講演と討議の記録について、「講演 映画『美しい星』の世界 制作の現場から -」講師・吉田大八、司会・有元伸子、久保田裕子(「三島由紀夫研究『豊饒の海』の時代」、2020.5)の構成・編集を行い、公表した。1960年代の三島の活動の一環として、小説が現代の映画などの表現活動に与えた影響という課題が明らかになった。

三島とアジアの問題を考察する上で、1960年代後半の三島の海外踏査と、同時代の総理大臣佐藤栄作の東南アジア歴訪の経緯について明らかにした。佐藤政権の政策については、佐藤の首席補佐官楠田實を通して、三島はさまざまな助言を残している。日本とアジアの間にあるアメリカとの三国間の問題について考察するために、三島の「文化防衛論」と楠田の日記の記述とを比較検討した研究発表「アジアの向こうのアメリカ 『楠田實日記』の中の三島由紀夫と佐藤栄作」(日本社会文学会関東甲信越ブロック12月例会、2019年12月15日、明治大学駿河台キャンパス)を行った。本発表を通して、タイ 泰 ・ 仏印 をめぐる文化表象が、日本語テキストにおいてどのように構築され、流通したかという問題についての考察と分析についての成果を発表した。

1960年代後半の日本と東南アジア地域との政治的・経済的交流が、日本近代文学の領域に与えた影響を考察するために、「文化防衛論」の中のアジア 『佐藤栄作日記』と『楠田實日記』の記録から」(「絃説」18号、2020年11月)では、佐藤栄作政権の東南アジア歴訪と、三島由紀夫のタイ・ラオス取材の軌跡を重ね合わせ、ベトナム戦争下のアジア王室の問題が、1960年代の三島の天皇制に関する議論に与えた影響についての成果発表を行った。

日本人の異文化体験の歴史的経緯の一環を明らかにするために、大庭みな子の小説における1960年代の日系企業の海外駐在員の異文化交流の経緯を明らかにした。高度経済成長期の日本企業のアジア進出や、海外移住者の国際体験といった課題を持つ 戦後文学 の中で描かれた異文化表象について考察した「生きものの記憶 大庭みな子「トーテムの海辺」の軌跡」(「絃

説」(18、2020年11月)を発表した。

1960年代後半のベトナム戦争下にあったインドシナ半島と、日本との政治的関係性が、同時代の批評をめぐる言説にどのような影響を与えたかという問題について考察し、三島の天皇論が同時代の国際関係状況に影響を受けつつ構築された過程を明らかにした「文化概念としての天皇」とは何か 三島由紀夫「文化防衛論」と同時代批評」(「福岡教育大学国語科研究論集」第62号、2021年3月)を発表した。

## (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

研究代表者は、研究期間を通じて、日本とタイ及び東南アジアの歴史・文化交流を背景としたテキストについて考察するために、タイ人研究協力者と国際共同研究を継続した。その成果を国際学会において発表し、両国の国際学術文化交流にも寄与することができた。本研究の課題として、タイ 泰・仏印 をめぐる文化表象が、小説などの日本語テキストにおいてどのように構築され、流通したかという問題についての考察を研究協力者と今後も継続する予定である。日本・タイにおいて実施した国際的な学術的調査・研究協力の一環として、ナムティップ・メータセート(チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座准教授)、タナポーン・トリラッサクルチャイ(チェンマイ大学人文学部講師)と研究についての国際研究者交流を行い、さまざまな歴史的・文化的事情についての助言を得た。その研究成果として、「アンコールの彫像 三島由紀夫『瀨王のテラス』」(タイ国日本研究国際シンポジウム2018、2018年8月25日、チュラーロンコーン大学)では、国際学会において成果発表を行った。日本・タイにおいて国際的な学術的調査・研究協力の一環として、本研究の研究協力者であるナムティップ・メータセートは、「第4回三島由紀夫とアダプテーション研究会」(2019年12月9日、広島大学東千田キャンパス)において、「タイにおける「羅生門」の受容とアダプテーション」を発表した。研究代表者は、研究会の企画・運営を担当した。

## (3) 今後の展望

日本で刊行されたタイ 泰・仏印 に関する図書・雑誌などの日本語資料の調査・収集と分析を継続して行う。今後の研究課題としては、主に太平洋戦争期の 大東亜共栄圏 時代、1960年代 以後の高度経済成長期、1980年代以降のツーリズムの時代から現在までの時代の文学テキストを対象として、本研究における調査・分析を継続し、戦後文学 における国際的な側面を明らかにすることを目的とする。

本研究の調査結果をふまえ、アジア地域との関係性が三島のテキストにどのような影響を与えたかという課題研究を継続して行うことで、三島由紀夫研究の新たな側面をひらく可能性がある。

日本近代文学に描かれたタイ表象という同一テーマを持つ日タイの研究者が双方向的な視点から分析することで、日タイの学会などを通じて研究交流の場を作り、国際的共同研究における波及効果が期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 久保田裕子	4. 巻 19
2. 論文標題 三島由紀夫『春の雪』におけるシャム王室と留学制度	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三島由紀夫研究	6. 最初と最後の頁 16～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久裕子裕子	4. 巻 18
2. 論文標題 生きものの記憶 大庭みな子「トーテムの海辺」の軌跡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 絃説	6. 最初と最後の頁 9～21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田裕子	4. 巻 18
2. 論文標題 「文化防衛論」の中のアジア 『佐藤榮作日記』と『楠田實日記』の記録から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 絃説	6. 最初と最後の頁 123～139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田裕子	4. 巻 62
2. 論文標題 「文化概念としての天皇」とは何か 三島由紀夫「文化防衛論」と同時代批評	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	6. 最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 久保田裕子
2. 発表標題 アンコールの彫像 三島由紀夫『癡王のテラス』
3. 学会等名 26. タイ国日本研究国際シンポジウム2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田裕子
2. 発表標題 歴史的言説のアダプテーション 三島由紀夫『癡王のテラス』
3. 学会等名 第2回三島由紀夫とアダプテーション研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田裕子
2. 発表標題 アジアの向こうのアメリカ 『楠田實日記』の中の三島由紀夫と佐藤栄作
3. 学会等名 日本社会文学会関東甲信越ブロック12月例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 久保田裕子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 六花出版	5. 総ページ数 510
3. 書名 『新編日本女性文学全集』第9巻、竹西寛子・原田康子・吉田知子（解題・略年譜・参考文献）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
タイ	チュラーロンコーン大学			
タイ	チェンマイ大学			